

ある。また経験的にも喘息の発作が天候の変化を予知するというようなことが言われている。極端なものになると前線通過の数日前から、病状の変化が前線の通過を予知したというようなことが言われている。

しかし、このような経験から前線との直接の結びつきを想定することは、気象学的常識に反することではないだろうか。というのは前線または気圧の谷の移動は、平均して大よそ経度10度/日であるから、2日も前になるとその位置はその場所からはるかに西方にあつて、とうていその場所に対して前線の直接の影響を考えることはできない。また前線が2日も3日も、その姿をかえずに存在することは少いのであって、機構的にも直接の結びつきはつけにくいのである。その上、われわれの調べた秋、冬の結果では、前線通過前に増加した発作回数は、前線の通過などをともなった天候の変化と共に、急に減少してしまうのである。もし前線通過による寒冷刺戟がその原因であるというのなら、前線の接近と共に増加するのか当然であつて、われわれの得た結果はこのような前線との直接の結びつきをある意味で否定するものである。

しかしながら、今までの調査ないし経験は、前線通過前に移動性高気圧の通過があるというような、天候変化の型に注目することにより、無理がなく、直接の結びつきとして説明が可能となる。これについてはすでに詳説したのでくりかえさないが、少くも今までの前線通過のみに直接結びつけた調査が再吟味を要することは明らかであろう。

なお気象要素との関連については、例えば Scholnicov がプエノスアイレスの資料について行なったもののように、気温との関連を注目したものもあるが(6)、これは寒

冷刺戟としてだけでなく、低温→気温逆転→風の弱い高気圧型の天気、というように関連づければ、これはアレゲン増加の気象条件を注目するわれわれの考え方とも矛盾しないであろう。

最後に注意しておきたいことは、以上の結果は秋、冬期についての考察であるということである。春、夏期にはここに考察したとは別の型があることは(1)の報告からも明らかであつて、これについては別の機構が考えられねばならぬであろう。引きつづき貴重なデータの蒐集が行なわれているので、春夏については改めて報告することにしたい。

この報告を書くについて、色々と討論していただいた川上武、清水保の両氏、および材料の蒐集について多大の労力をついやされた浅野知行、笠井和の両氏に、最後に厚くお礼を申上げたい。

参 考 文 献

- 1) 根本順吉・川上武・加藤毅, 1958: 気管支喘息と気圧配置との関連について(1例報告), 天気, Vol. 5, No. 12, p383~385.
- 2) 笠井和の他と共著で, 東京女子医科大学雑誌(1962)に現在印刷中
- 3) 正務章, 1949: 阿蘇山における気温の通減率および逆転の調査, 研究時報, Vol. 1, No. 12, p402-405.
- 4) 根本・川上・多田・加藤, 1960: 気管支ぜん息発作と気圧配置との関連, 研究時報, Vol. 12, No. 3 p143~146.
- 5) 大田正次, 1960: 逆転層と煙の拡散, 気象研究ノート, Vol. 11, No. 5, p305~306.
- 6) 北原静夫・河本和也, 1959: 気管支喘息の臨床観察, 日本臨床, Vol. 17, No. 3, p441.

気 象 界 消 息

1. 柳井氏アメリカに留学

気象研究所台風研究部の柳井迪雄研究官は、7月15日から1年間、ハリケーンの研究のため、アメリカ合衆国のコロラド大学に留学される。

2. 福岡氏ヴェネズエラに留学

気象研究所海洋研究部の福岡二郎主任研究官は、7月16日から1年間、海洋学の研究のため、南米のヴェネズエラに留学される。

3. 杉浦氏オーストラリアに出張

気象研究所地球化学研究部第二研究室長杉浦吉雄氏は「第2回インド洋海洋観測の化学分析法基準化作業に関する会議」に出席するため、7月22日から8月12日まで

オーストラリアに出張される。

4. 第7号台風紀伊半島に上陸

第7号台風(Louise)は7月21日マーカス島(南鳥島)の南東約250kmで台風となり、北上、マーカスの北東方で進路を西に変え、24日父島の北方約100kmを通り、この頃から、西北西に向きを変え、27日紀伊水道の南方で転向、27日午後3時頃、紀伊半島の白浜と潮岬の中間に上陸した。その後名古屋の北を通り、中部山岳地域に入り急激に衰え、温帯低気圧となって太平洋岸に抜けた。転向点における中心気圧は、970m/s、26m/sの暴風半径は約100km、最大風速は40s/mであった。四国、近畿地方に大雨を降らせ各地に多大の被害があった。